

図画工作部会

< 県研究主題 >

豊かに感じ取る力を育てることを重視し、児童一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫

提案 1

提案者 吉野 淳 (中地区)

< 研究主題 >

つくりだす喜びを味わい、豊かな発想の能力を高める造形活動

1 提案内容

(1) 研究の取り組み

「創造的に表現」することに課題を感じている児童が、発想を膨らませたり、イメージを広げたりするための手立てや、取り組みについての実践報告であった。

(2) 授業実践

①題材名 「どうぶつむらのピクニック」 1 学年 表現 A - (2)

②指導の工夫

○ 発想の能力を高める手立て

「見立てる」「試す」「語る」ことは、発想を高めたり、形や色、イメージなどを捉えたりすることに有効的である。また、オープンスペースを活用したことで発想の共有ができ、子どもたちの作品づくりに対する意欲の高まりや、苦手意識のある子どもたちが抵抗感なく作品づくりに取り組むことができた。

○ 幼児教育から小学校教育への円滑な移行

遊びを通した学び方から、教科学習へと学び方を変える 1 学年は、幼児教育と小学校教育とをつなぐ橋渡しの学年である。そのため円滑に移行する工夫が必要である。幼児期からの系統的な導入方法である読み聞かせなどを取り入れたり、また共有しやすいテーマを用いたりしたことで見立てるヒントにつながっていた。

2 協議内容

- ・「見立てる」のところで『みんなでイメージを共有する』ために
→それぞれがどんな容器をどのように見立てたかを発表したり、電子黒板を使用し、全員で「これは、どう見えるのだろうか。」と共有の時間を設けたりした。発想が受け入れられたり、認められたりすることは、発想を広げる力につながったと感じる。
- ・なかなか発想できない子どもへの手立て
→まわりの友だちの様子を見ながらつくったり、教師がこんな動物に見えると言ったキーワードを投げかけたりすることで、作品をつくり上げることができた。
- ・導入の自作の物語をつくるにあたって、気をつけたこと
→国語の教科書にある子どもたちの好きな「おむすびころりん」などと同じように、語呂のよいリズムカルなことばを入れて、動物の様子を考えるヒントになれば良いと思った。
- ・読み聞かせの後の制作活動への入り方
→「材料の森から動物を探そう。」という教師の声かけで、材料バンクから箱を選び、いくつかを組み合わせ見せることで、子どもたちがつくる意欲が持てる環境づくりを意識した。

3 まとめ

①確かな学力を育てるために

図画図工科は、一人ひとりの表現のプロセスが目の前で展開されているので、子どもたちをよく観察することが重要な評価となる。子どもが何を考えているのか、何を感じているのか、子どもの動き、視線、会話などで捉えることができる。それぞれの題材で、どのような資質能力を身に付けどこに着目して評価をするのか学年・学校で共通理解を図ることが大切である。

②就学前の教育の学びと小学校教育の学びをつなぐこと

遊びを通した学びの要素が、各教科の学習内容にどのようなつながっていくのかをお互いに理解することが、子どもたちにとって安心して学習することと共に、発想を膨らませることにつながる。教育課程の段差を少なくして、なめらかな接続が大切である。

③中学校とのかかわり

中学校の美術科と技術・家庭科の技術面との関連する教科である。中学校の美術の時間がほぼ週に1時間。その中で能力を身に付けるということを考えると、小、中学校とのつながりを意識した年間計画を立てることが大切である。

提案2

提案者 黒澤 正道（横須賀地区）

<研究主題>

学校と美術館をつなぐアートカードの実践

～鑑賞の活動が表現の活動に生きる～

1 提案内容

(1) 研究の取り組み

- ① 美術館との連携、アートカードの活用
- ② 表現活動と鑑賞活動の一体化

(2) 研究の実践

- ① 題材名「私は学芸員（展覧会をつくろう）」 6学年 B鑑賞
- ② 題材のねらい

- ・美術館の「学芸員さん」と地域の美術館のたくさんの作品（「アートカード」）と出あう中で、自分なりに作品のよさを感じ取る。
- ・「ミニ展覧会」を企画し全体に発表すると同時に、他の班の「ミニ展覧会」を鑑賞し、それぞれの企画のよさや、作品を構成する要素を感じ取る。

(3) 研究の成果と課題

【成果】

- ・美術館鑑賞会の事前授業の際、「アートカード」を通して横須賀美術館の作品にふれあうことができ、美術館鑑賞会に向けての意欲づけになった。
- ・「ミニ展覧会」の企画では、共通点を見つけるという難しい作業となった分、活発な話し合い活動ができた。また、それぞれの思いを大切に、友だちの感性を認め合う姿も見られた。
- ・友だちの鑑賞の仕方に関心を持つことができ、同じアートカードを見ていても鑑賞の視点を変えてカードを見ることができていた。

【課題】

- ・アートカードを使った鑑賞の時間を各学年の年間学習計画の中に導入し、段階的に、継続的に

行うことで鑑賞する力を育てておくことと、ワークシートの改善の検討。

- ・感想を書くことが苦手な児童に対しての配慮。

2 協議内容

- ・アートカードとの出会いをどのように工夫したか。

→低学年の子どもたちには年度初めに図工は絵を描くこと、物を作ること、見ることであるという話を話した。特別教室なども活用し出会いの場所を工夫した。あらかじめアートカードを裏返しにしておき、カードを開いた時の感動を大切にしたい。

- ・鑑賞の視点はどのようなものか。思考の流れが残っていると思うが、その他のワークシートを見せていただけないか。

→「お気に入りの一枚」「展覧会に行こう」のワークシートなどがあつたことで、スムーズに発表できた。図工であっても感想を文字で残すことは大切であるとする。

- ・鑑賞の力と表現の力は違うものなのではないか。

→いろいろな経験を積む中で育てていけたら良いと思う。1年生から積み重ねていくとどうなるか楽しみである。失敗したと言っている友だちに「そうじゃないよ」と声をかけていたのは、鑑賞の活動が生かされていた結果なのかもしれない。

- ・抽象的な作品の評価はとても難しいと思うが、どのように評価したのか。

→こだわりを持って色を付けているか、題名にはどんな理由付けがあるか。

- ・表現と鑑賞はつながっていると思うが、お気に入りの一枚の3つの鑑賞がどのようにつながっているのかが分かりづらい。教科の目標を達成するための鑑賞活動でなければならないのではないか。よさや美しさをねらいとするなら、一枚を選んでそのよさや美しさに類似したものを集めていくのが良いのではないか。

→一番大切にしたいことは、初めての作品の中からお気に入りの一枚を選ばせたかった。どんな小さな発見でも大切にさせたかった。

3 まとめ

- ・課題を見つけて探究することが「学ぶ力」「意欲」につながり、学力が向上する。学習指導要領に「～活動を通して」学ぶとあり、まず活動することが大切である。図工を通して考える力や主体的に学ぶ力を自然に身につけることができる。
- ・鑑賞では、表現した人の思いを自分なりに感じ取る力を育てることが大切。子ども自身がとらえたことを具体的に文章で書かせることが大切である。
- ・作品の良しあしで見るのではなく、ねらい、育てたい力という観点で評価する。
- ・自分の思いを色・形など何かしら表現すれば良いと気づいたり、自分の表現に自信が持てるようになっていけば鑑賞と表現の一体化が図られているということなのではないか。

<グループ協議 まとめ>

提案1より

- ・幼稚園、中学校とのつながりも意識して年間計画を立てている。
- ・学年に応じた道具や用具の使い方をしっかりさせることで表現の技能が高まっていく。
- ・「見立て」「試し」「作品づくり」は、子どもの中では一緒だが、その中で分類していく教員の目線が大事。
- ・「材料の森」「突撃インタビュー」など子どもがドキドキ、ワクワクするようなことばの選定⇒場の設定が大切である。
- ・教師と子どもたちとの関係、教室の風土や文化が「やってみよう」「描きたい」という気持ち

につながる。

- ・材料の充実、オープンスペースなど場の設定や、自作の物語を読み聞かせての教材との出会い、そして子どもたちとの対話や、声かけの中で、活動の過程でも児童を見取っていくこと。
- ・導入の工夫として、発達段階に合わせたものを考えることが大切である。
- ・一人ひとりの感覚や活動が大切にされている。⇒表現への自信や安心感につながる。

提案2より

- ・いろいろな表現を見ていて、自分の表現活動のときに生かすことで、鑑賞と表現がつながっていくと思うので、アートカードの活動は大変意義のあるものだ。
- ・鑑賞の学習だけで1時間は難しいが、アートカードの準備があるとよい。教員の一つの手段になり得るものと期待したい。
- ・幼、小、中、大人になるまでにどのような鑑賞能力をつけさせたいかという大きな視野を持った段階の積み重ねが大切。
- ・地元の美術館との連携⇒鑑賞教育が生涯教育につながるように。
- ・美術作品に触れることは大切。⇒事前、事後の指導
- ・感じたこと、考えたことを文章に残すのは大切。教員には、その子自身が捉えたものを見取る力が必要。

課題点・改善アイデア・自校での実践等

- ・カードによって使い方が異なったり、学年によってめあてが変わったりと使い方も異なる。
- ・どう、これから子どもたちに仕掛け、アプローチしていくのか開発していく余地がある。
- ・鑑賞能力のポイントを絞り、ねらいを明確にさせていくことが大切。
- ・教師の価値観に子どもが左右されてしまうと、自分の表現に自信が持てなくなってしまう。
- ・アートカードを利用した活動の中で「共通点を見つける鑑賞」⇒ねらいは何だろう。
- ・美術館への交通手段が確保されていても、遠足気分の学校があるのが現状である。鑑賞教育を軽視している場合もあり、課題となっている。

<まとめ>

○図画工作科の目標を見てみると、豊かな情操ということばが入っている。目標に豊かな情操をねらいとしている教科は音楽科と図画工作科のみである。だからこそ、一人ひとりに寄り添い、すべての子どもたちに対して授業構成していくことが重要である。低、中、高学年の発達段階に応じて教科目標を達成していくことが大切である。

○改善の基本方針の課題（解説P3）

図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する。

その課題とは、感性を働かせて思考・判断し、創意工夫をしながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成することなど

何を身に付けさせたいのかをしっかりと持ち、児童の学びを起点として授業づくりをしていくことが大切である。それらを示していくことによって社会的にも確認され、課題は克服されていこう。それぞれの学校の実態に応じて、基礎的な能力を培い、豊かな情操を養っていくことが大事である。